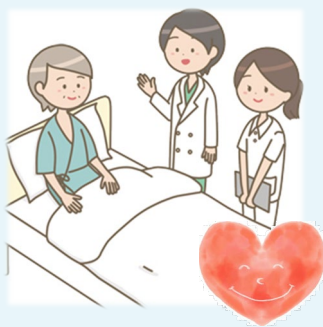




医療の現場アラカルト - Vol.3

ベトナム語担当 Tさん

医療通訳者としてベトナム人の患者さんに対応する際、患者さんが不安を感じたり、逆に医療スタッフが心配したりする場面に直面することがよくあります。例えば、手術前の同意説明の場面で、ベトナムでは手術のリスクや合併症について詳細に説明されることはあまり一般的ではありません。一方、日本では手術の目的だけではなく、手術中や手術後に起こり得るリスク、合併症についても非常に詳しく説明されます。このような説明は、患者さんが手術の内容やリスクを理解し、心の準備をするために大切ですが、説明が詳しくなればなるほど、患者さんは混乱しやすくなり、「手術が恐ろしいものだ」といった不安が表情に表れることが多くあります。特に、「最悪の場合には…」といった表現を聞くと、患者さんの手術そのものに対する恐怖はMax! となることも少なくありません。



また、大腸内視鏡検査など検査の受け方に関する説明において、詳細な説明が行われてもベトナム人の患者さんはあまりメモを取りません。ベトナムでは診察時間が短く、説明も簡単なので、患者さんはメモを取らずに記憶に頼るのが一般的です。しかし、日本では医療スタッフが非常に細かく説明するため、患者さんがメモを取らないと「すべて覚えているのか？」と逆に心配されることがあります。

このような場面では、医療通訳者は単に言葉を訳すだけではなく、患者さんと医療スタッフの間のコミュニケーションを円滑にし、双方が安心して対応できるようにする重要な役割があると感じます。



「TOWAROW PARK Festival 2024」

通訳センターのある当社関西支社で、11月初め、「TOWAROW PARK Festival 2024」という内覧会を開催しました。これは年に1回、お客様を当社にお招きして、東和のいろいろなソリューションに触れていただくというものです。前月に東京本社で開催された際には3日間でおおよそ600人、今回の関西支社では2日間で120人以上のご来場がありました。

我がmedi-wayにも、たくさんの方がお立ち寄りくださいました。とは言っても、通訳中のところにお客様を招き入れることは、個人情報を守る意味でも絶対にNGです。そこで、センターの外側に設置したデモ機で、呼び出していただき、空いている通訳者が対応しました。ほぼワンタッチで通訳者が画面に現れて、担当者が画面を見ながら説明を行うといったデモを多くのお客様に体感いただき、画面の向こうの皆さんの「へーっ」という顔を拝見して、楽しい時間を共有できました。



今月のトピックス



「ジェンダーレスの波」



先の衆議院選挙でも「選択的夫婦別姓」や「同性婚」が論点になりました。確実に進んでいるジェンダーレス社会への変化、その波は私たちの話す言葉の面にも押し寄せています。

かつて中学校で英語を習い始めた頃、代名詞は男性なら「he」、女性なら「she」、複数なら「they」、皆さん覚ええましたよね。ところが最近、男性・女性を問わない代名詞として「they/them/their」を単数として使う例が見られるとのこと。LGBTQ+への理解を、言葉の面でも表しているのでしょうか。

昨年、母国へ里帰りしていたスペイン語通訳者の話です。元々スペイン語には性別による使い分けがあって、語尾が-oなら男性、-aなら女性、-eなら中性となり、しかも名詞だけではなく、名詞に付く冠詞や形容詞もそれぞれ違うそうです。有名な「エルニーニョ」は-oなので「男の子」、「ラニーニャ」は「女の子」の意味。さて、通訳者はある日、女の子のグループに話しかける場面で「チャオ、chicas(チカス)」と言ったらシーンとなって変な顔をされたそうです。エッ!とビックリして確認すると、性自認が女性でない人のいるグループだったので、そんな時は「chiques(チケス)」と中性の言葉で呼びかけるべきだったとのこと。まだ、国として正式に変更を決められたわけではないようですが、言葉は人と人を繋ぐもの、相手を思って言葉を使い分けることは大切だと思いました。

